

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02541

研究課題名(和文) 現代中国語への道程：語彙二字語化における外部誘因、特に日本語の影響に関する研究

研究課題名(英文) The process into modern Chinese: Japanese as one of external incentives for the disyllabification of lexicon

研究代表者

沈 国威 (SHIN, KOKUI)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：50258125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、語彙の近代化という視点から中国語の二字語化現象を考察した。筆者は、次のような理論的枠組みを提唱した：中国語の近代化には、一、新概念は、二字語で表現し、二、既存の概念を表す一字語は、同義の二字語(群)を獲得しなければならない。一方、日本語の近代化は、一、新概念は、二字漢語で表現し、二、既存の概念を表す和語は、同義の二字漢語(群)を獲得しなければならない。両言語は、二字漢語という点に関連づけられる。20世紀に入ってから、日本語が中国語に強い影響を与えた。本研究は、大規模の語彙調査を通じ、それを初歩的に実証した。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the disyllabification of the lexicon existed in Chinese from a perspective of modernization of lexicon. Hypotheses are proposed as follows: In the process of the modernization of Chinese, new concepts gradually start to be represented by disyllabic words, while monophonic words with old concepts have to acquire a (a group of) disyllabic form. Simultaneously, the modernization of Japanese also shows some similar disyllabification characteristics. First, increasing Chinese disyllabic words are used to represent new Japanese concepts. Second, Japanese original words that contain old concepts have to add a (a group of) form of disyllabic Chinese words. Both of the two languages assume a trend of disyllabification in the lexicon. Since twentieth Century, Japanese has fulfilled an important role over the process of Chinese disyllabification, which has been preliminarily confirmed through the large-scale lexicon investigation in our research.

研究分野：言語学

キーワード：日中語彙交流 二字語化 和漢相通 一字語二字語相通 漢字語 学術用語 叙述語 基本語化

1. 研究開始当初の背景

中国語は、五四運動以降の現代語へと成長していく過程において、最大の変化は語彙の二字語化(中国では「双音節化」と言えよう。二字語化により、中国語は、1、体言・用言間の品詞転換が可能となった。2、形式動詞「進行、加以、給予…」や二音節介詞「对于、關於、作為…」の頻繁使用により連体修飾節が長大となり文構造が一変した。3、言文一致が達成されたという近代的变化が成し遂げられた。二字語化には中国語の“進化”趨勢という内部要因と外国語との接触による影響という外部要因が考えられるが、従来の研究では二字語化現象を漢代以降から続いた中国語の通時的な変化と捉えるものが多く、外部要因、特に日本語によって及ぼされた影響に関する研究は少ない。

二字語化は語彙に留まらず、文法、文体に跨がる現象として、中国語を近代的に特徴付けた最も大きな変化と言えよう。早くも漢代に始まったとされる二字語化は、晋唐の佛典翻訳によって大いに発展し、19世紀に入ってから、特に五四新文化運動以降、語数が急増し、今の局面を迎えた。王力、呂叔湘ら先学諸氏も注目した二字語化現象の誘因とメカニズムに、近年董秀芳氏の《詞彙化：漢語双音詞的衍生和發展》(初版2002、修訂版2010)に代表されるように、研究者が高い関心を示している。董氏は、共時的、通時的な方法により二字語化の過程を連続的に捉えようとするが、必ずしも19世紀以降の言語事象を考察の対象に加えることなく、現代語とはやはり断絶されていると言わざるを得ない。董氏ばかりでなく、これまでに現代中国語の形成に関する研究に19世紀から20世紀初頭までの部分が欠如した観があり、近代語から如何に現代語へと成長していったかという視点に基づく考察が不足していると思われる。一方、近代

日中語彙交流に関する研究では、学術用語の貸借、新概念の導入に強い関心が示されているが、語彙体系や造語法への影響を問うものは少ない。新しいアプローチが必要な所以である。

2. 研究の目的

本研究は中国語の二字語化を漢字文化圏諸言語の近代化という背景において西洋書の翻訳と同時に日本語による影響の実態をも明らかにするものである。

日本語ないし西洋言語の影響を抜きにしては、現代中国語の成立が語れない。王力『漢語史稿』(1958)、北京師範学院『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』(1959)は、早くからその方向性を指摘していたが、実証的な研究は少ない。本研究の特色は、漢籍や近代以降の言語資料を収録したコーパスを駆使し、日中同形語を切り口に、現代中国語の二字語の活発化に与える日本語の影響を、形式動詞、二字前置詞も視野に入れ、発生的に解明しようとする。本研究の成果により、分断されがちな近代語と現代語の語彙研究は、1つのプロセスとしてとらえることが可能となり、現在進行中の中国語近代化に関する研究も大いに促進されるものと確信している。

3. 研究の方法

従来の研究は、19世紀以前の二字語に対し、個別語誌の考察が多く、連語から複合語に発達していくという語形成論的な考察も散見するが、いずれも中国語の發展趨勢という内部要因にのみ関心が払われていた。しかし現代語の二字語は短期間に形成されたものであり、語彙化の視点だけではその急増ぶりを説明できない。いわゆる語彙化は長い時間を要とするプロセスだからである。董氏も指摘しているように語彙化の実現に「緊隣共現」と「高頻使用」が先決条件であるが、どちらにせよ日本語の中国

語訳が深く関わっている。即ち二字語の急増に人的・書籍の交流によってもたらされた言語接触という東アジアの近代に特有の事情があり、それを言語変遷の外部要因として考察の対象に加えなければならず、漢字文化圏における諸言語間の相互作用という新しい視座が必要である。本研究は「周縁アプローチ」という研究法で、中国内部の資料だけではなく、歴史上中国語および中国語研究と密接な関係のある周縁資料をも視野に入れ、ビッグデータに支えられているコーパス語源学の手法を駆使し、近代以降の中国語の変化を捉えるものを目指す。現代中国語に語彙面において最も大きな影響を与えたのが日本語である。中国語に翻訳された日本の図書や、中国の辞書類（国語辞書、英華辞書、術語集）の編纂に利用された日本の辞書は言うまでもないが、本研究は、上述した資料に加え、近代以降の言語資料を収録したコーパスを駆使し、日中同形語を切り口に、現代中国語の二字語の活発化に与える日本語の影響を、形式動詞、二音節前置詞も視野に入れ、発生的に解明しようとする。具体的に以下の事項を中心に考察してきた。

- 二字語の増加と学術用語の成立の相関関係；
- 二字語の増加と数百と数える含同語素類義語群（改、改革、改善、改良、改変、改進；薄弱、微弱、軟弱、脆弱）の出現、分布上の日中異同；
- 二字語の増加と形式動詞（進行、加以…）、二音節前置詞（对于、関于、作為…）の発生と連体修飾成分の長大化の現状；
- 二字語化における語彙化説の不備と日本語による決定的な影響の実証；

4. 研究成果

申請者はここ数年、中国語の近代化における外来要因、特に語彙レベルでの日本語

の影響について考察を重ねてきた。考察の過程で『現代中国語常用詞彙表』（56006語）から日中同形語を16292語確認した。いわゆる日中同形語には（1）「哲学、義務」のような和製漢語、（2）「革命、経済」のような和製新義語、（3）「学校、方案、改善、薄弱」のような一般語がある。（1）と（2）は数百語の規模で、名詞性の学術用語が中心である。（3）は名詞のみならず、動詞、形容詞、副詞と全品詞にわたって存在し、今日の文化的言語生活を支えている抽象語彙として現代中国語の語彙体系を特徴付けている。千語以上あると考えられる（3）の語は、その多くが中国の古典に見られる文字列であり、意味も古典語と歴然とした断絶が認めにくい。その殆どは19世紀末から急に動きを活発化させられたものである。このような二字語の活発化は、漢字文化圏の諸言語にも見られる現象で、時間的に日本語、中国語、韓国語、ベトナム語の順に発生したことも近代語彙交流の研究によって明らかになった。そこに当然相互間の影響関係が考えられよう。のみならず、漢字という表記体系が持つ超言語的特徴を示唆する事象も多く存在する。本研究は、類型論的に異なる言語を跨がる現象として二字語の近代以降の活発化を記述すると同時にその原因となる日本語の影響を解明しようとするものであり、中国語のみならず漢字を使用する（した）漢字文化圏の他の言語の語彙体系の近代化研究にも寄与するであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19件）

対譯與解読：嚴復『政治講義』（IV）、沈国威、査読無、共著、『或問』32号、139-156頁、2017.12

対譯與解讀：嚴復『政治講義』(III)、沈国威、查読無、共著、『或問』31号、167-182頁、2017.6

嚴復譯詞引發的若干思考、沈国威、查読有、単著、『翻譯史研究』(香港中文大學)2016号、190-215頁、2017.5

近代英華字典環流：從羅存德，井上哲次郎到商務印書館、沈国威、查読有、単著、『思想史7』(台灣中央研究院)專號：英華字典與思想史研究、64-102頁、2017.5

19、20世紀之交的「新名詞」和新國語、沈国威、查読無、単著、孫江ほか編『學衡名家講演錄』第1卷、南京大學出版社、50-62頁、2017.5

嚴復的「格致」：從培根到斯賓塞以『天演論』前後為中心、沈国威、查読有、単著、『亞洲概念史研究』(南京大學)第3号、49-81頁、2017.4

「我們為什麼需要二字詞？語言接觸與漢語的近代演化：序說」、沈国威、查読無、単著、『東アジア文化交渉研究』、第10号、101-118頁、2017年3月

「中国語語彙体系の近代化問題：二字語化現象と日本語の影響作用を中心として」、沈国威、查読無、単著、『周縁アプローチによる東西言語文化接觸の研究とアーカイブスの構築』、内田慶市編著、關西大學東西學術研究所、15-35頁、2017年1月

嚴復『天演論』中的培根、沈国威、查読無、単著、『青木五郎教授喜壽記念論文集』、86-97頁、2016年12月

「対譯與解讀：嚴復『政治講義』(II)」、沈国威、查読無、共著、『或問』、30号、127-144頁、2016年12月

「漢字文化圈における近代語彙の形成と交流」、沈国威、查読無、単著、『高知大學留學生教育』、第10号、

19-44頁、2016年12月

「中国語近代翻譯文体的創出：嚴復の場合」、『文化交渉学のパーспекティブ—ICIS 國際シンポジウム論文集』(查読無)、沈国威・吾妻重二編著、關西大學出版部、63-83頁、2016年8月

「対譯與解讀：嚴復『政治講義』(I)」、沈国威、查読無、共著、『或問』、29号、191-210頁、2016年6月

漢字の意味とその獲得、沈国威、查読無、単著、『中国文學會紀要』37号、15-36頁、2016年3月

近代漢字訳語の研究について：中国語からの視点、查読無、単著、『東アジア言語接觸の研究』、内田慶市・沈国威編著、關西大學出版部、19-51頁、2016年3月

『中日近代新詞詞源詞典』の編纂について、沈国威、查読無、単著、『或問』第28号、225-242頁、2015年12月

連載：中国語語彙學習の話し、沈国威、查読無、単著、(1)語彙力と語彙サイズ；(2)字から詞へ；(3)單語の長さ。

『中国語の輪』第99号12-13頁；100号12-13頁；101号12-13頁；2015年19-20世紀之交的翻譯與漢語：以嚴復為說、沈国威、查読無、単著、『合璧西中——慶祝顧彬教授七十壽辰文集』、2015年294-311頁

嚴復科學思想的淵源：從培根到穆勒、沈国威、查読無、単著、論文集『思想與方法』方維規主編、北京大學出版社、245-290頁、2015年

〔学会発表〕(計 22 件)

「権/利・力」考：概念範疇的確立及詞化、沈国威、查読無、単著、中国現代政治-社會關鍵概念研討會：概念史研究的亞洲轉向(於南京大學)、2018年3

月

善鄰譯書館與明治期的漢學家—以岡本監輔及其《東洋新報》為中心、沈国威、查読無、單著、第二屆中國翻譯史國際研討會：贊助者的角色（於香港中文大學）、2017年12月

近代漢語的基本語化について、沈国威、查読有、單著、日本語学会2017年秋季大会（於金沢大学）、2017年11月

科学之于嚴復：讀『西學門徑功用』、沈国威、查読有、單著、「科学」術語：理解、闡釋與傳播研究会（於上海復旦大學）、2017年11月

概念史研究的內涵與外延：理論與方法論視角的再梳理、沈国威、查読有、單著、概念·詞語的歷史脈絡研究会（於北京外國語大學）、2017年09月

國語的科学，科学的國語、沈国威、查読無、單著、國際學術研討會：現代文學與書寫語言（於北京大學）、2017年09月

いわゆる「基本語化」現象について—言語接觸と語彙体系の近代化、沈国威、查読無、單著、第五回中日韓朝言語文化比較研究國際シンポジウム（於延邊大學）、2017年08月

『辞源』(1915)與漢語的近代化、沈国威、查読有、單著、國際學術研討會：商務印書館與中國現代文化的興起（於北京：商務印書館）、2017年08月

近代關鍵詞的誕生與科学敘事、沈国威、查読無、單著、中國近代核心概念的翻譯與傳播」國際學術研討會（於香港中文大學）、2017年06月

近代語研究と概念史、沈国威、查読有、單著、東アジア文化交渉学会（於北京外國語大學）、2017年05月

嚴復と訳語「自由」、沈国威、查読無、單著、國際シンポジウム：語言的權力、權力的語言（於台灣政治大學）、2016

年11月

近代關鍵詞的誕生、沈国威、查読無、單著、國際シンポジウム：共創亞太新未來（於南京大學）、2016年10月

漢和辭典的近代化、沈国威、查読無、單著、國際シンポジウム：海外文獻的收藏與中國近現代史研究（於復旦大學）、2016年10月

字本位・詞本位之爭的終結、沈国威、查読有、單著、國際シンポジウム「漢字教育」（於北京語言大學）、2016年07月

嚴復と「自由」、沈国威、查読無、單著、沈国威、國際シンポジウム「東アジア言語の接觸研究」（於上海東華大學）、2016年03月

嚴復科學思想的淵源—以『天演論』為中心的討論、沈国威、查読無、單著、國際シンポジウム：中國翻譯史進程中的訳者（於香港中文大學）、2015年12月

近代新詞與漢語的雙音節化演進、沈国威、查読無、單著、世界漢語教育史學會（於廈門大學）、2015年11月

近代英華辭典環流：從羅存德、井上哲次郎到謝洪賚、沈国威、查読無、單著、英華字典與近代中國國際シンポジウム（於台灣中央研究院）、2015年08月

近代訳語はどう創られたのか？、沈国威、查読無、單著、國際シンポジウム：文化交渉学のパースペクティブ（於關西大學）、2015年07月

嚴復「科学」概念的變化、沈国威、查読有、單著、アジア学会（AAS）（於台灣中央研究院）、2015年06月

21 近代思想史と語彙史の間：「樂觀・悲觀」を例に、沈国威、查読無、單著、國際シンポジウム：東アジアにおける漢字漢語の創出と共有（於早稻田大學）、2015年03月

22 新漢語の二字語化について：中国語への影響も射程に、沈国威、査読無、単著、日本語彙史研究会（於関西大学）
2015年04月

〔図書〕（計 4 件）

『嚴復與科学』、沈国威、単著、全 290 頁、南京：鳳凰出版社、2017.5

『珍藏本字典集成 影印与解題』、沈国威・内田慶市共編著、商務印書館、2016.12

『東アジア言語接触の研究』、内田慶市・沈国威共編著、関西大学出版部、全 440 頁、2016 年 3 月

『嚴復與科学』、沈国威、私家版、関中研、全 212 頁、2015 年 4 月 1 日

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

成果報告書

『現代漢語詞彙義系』、沈国威、共編著、全 420 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沈 国威 (SHIN, Kokui)
関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：50258125

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者
()